

第9週(2月26日～3月3日)トピックス:<レジオネラ症>

京都市では、2023年に、レジオネラ症の報告が24例(2022年は25例)ありました。また、全国では2,271例(2022年は2,129例)で、共に前年とほぼ同数でした。全国の年間報告数は、年ごとの差があるものの、2019年までは増加傾向が続き、その後は2,000例程度で推移しています(図1)。

過去10年間の全国における性別・年齢階級別割合を見ると、性別では、男性が約8割、女性が約2割、年齢階級別では、男性の50歳以上が全体の7割以上を占めています。また、女性でも70歳以上の報告が多くなっています(図2)。

レジオネラ症は、レジオネラ属菌が原因で起こる感染症の総称で、肺炎型とポンティアック型が知られています。肺炎型は重症例の多いレジオネラ肺炎を引き起こし、適切な治療が行われない場合、呼吸困難や多臓器不全を呈し死亡する場合があります。ポンティアック型は発熱程度の比較的軽症の例が多いと言われています。レジオネラ症は感染症法における全数把握感染症(4類感染症)に規定されており、診断した医師は直ちに最寄りの保健所に届け出なければなりません。

レジオネラ属菌は本来土壌や河川などに生息する常在菌ですが、人工的に作られた水環境(循環式浴槽、冷却塔、加湿器等)中にも生息しています。ヒトへの感染経路として、レジオネラ属菌を含む水から発生したエアロゾルや土木作業や庭いじりなどで発生した塵埃(じんあい:ちり・ほこり)を吸入したことによるものが知られています。なお、レジオネラ症は、ヒトからヒトへの感染はありません。

日本国内では、公衆浴場等の入浴施設において衛生管理の不十分な浴槽水を原因とした集団感染や、加湿器を原因とする感染事例が複数報告されています。病原体に曝露されても必ずしも発症するわけではありませんが、高齢者や免疫の低下している人は注意が必要です。

レジオネラ症における浴槽の感染予防対策として、浴場等における配管・タンク内部の定期的な清掃・消毒の実施が重要となります。また、個人においても加湿器等のこまめな清掃や、土いじりの際にちりやほこりを吸い込まないようにマスクを着用することが重要です。厚生労働省ホームページ(下記URL)にも情報が提供されています。

○レジオネラ症(レジオネラ症の解説:厚労省)

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_00393.html

○レジオネラ対策のページ(主に公衆浴場や旅館等の施設における対策:厚労省)

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000124204.html>

図1. 京都市及び全国の報告数の推移(2006～2023年)

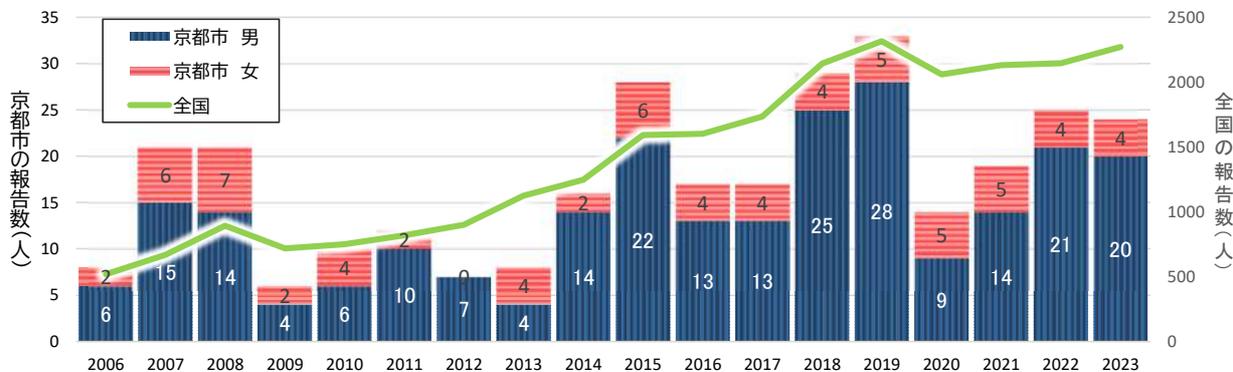


図2. 全国の性別・年齢階級別割合(2014～2023年)

